佳作（高学年の部）

# 心の中の家族

鹿児島県　南種子町立長谷小学校 五年
山﨑（やまざき） 陽介（ようすけ）

ぼくは、去年の八月、宇宙留学のことを知りました。くわしく調べてみたら面白そうだったので、絶対に行きたいと思いました。九月から申し込めると聞いて、あわてて作文を書いて送ってもらいました。お母さんは、一年間もはなれてくらすのはさびしいと言いましたが、ぼくは楽しいことばかりを考えていたので、全く心配はしていませんでした。

そして今年の四月、ぼくは種子島に引っ越してきました。お母さんと一緒に里親さんの所へ行きました。自分の机とベッドが用意してあり、うれしくなりました。同じ部屋に住む友達ともすぐに仲良くなって、ぼくはワクワクが止まりませんでした。

始業式の次の日、お母さんと一緒に種子島宇宙センターへ行きました。施設を案内してくれるバスツアーの予約をお母さんがしてくれていたので、ぼくも楽しみにしていました。実物のロケットやエンジンを間近で見たり、発射場のそばまで行ったりするはずでした。でも、宇宙センターに来ていた友達が、そのツアーに参加できないことを知って、ぼくはバスツアーをキャンセルしてとお母さんに言いました。お母さんより友達と一緒にいたいと思ったからです。その日の夕方、お母さんは東京に帰って行きました。

種子島での新しい生活は新鮮で、最初の三日間は楽しいだけでした。でも、四日目の夕方、一人で宿題をしていたときに、ふと涙が出てきました。バスツアーをキャンセルしたときのお母さんの残念そうな顔を思い出したからです。あやまりたいと思ったけれど、電話をすることもできず悲しくなりました。その日からずっと、家族とはなれていることが、とてもさびしくなってしまいました。

そんなとき、ぼくはおなかをこわし入院しました。よく朝、一人で病室にねていたら、お母さんが来てくれました。ひさしぶりに顔を見たら、安心して涙が出て来ました。お母さんも泣いていました。それから三日間、お母さんが病室に泊まり、たくさん話をしました。バスツアーのこともあやまりました。種子島に来てからさびしくて、本当は東京に帰りたいことを話したら、お母さんが、

「はなれていてもずっと、いつも陽介のことを思っているから、さびしくないはずだよ。」

と言いました。

それからぼくは、家族がいつも遠くから守ってくれていると感じるようになりました。はなれていても、心の中に家族がいます。だからぼくは一人でもがんばれます。

いつも心の中にいてくれてありがとう。安心と勇気をくれてありがとう。